

福岡大学教授 西園昌久著

「新しい精神医学と看護」

——力動的理解と実践——

東邦大学助教授 柴田洋子

著者は早くから精神分析の立場にもとづいて治療研究にかかわり、実践面でも多面的な活躍をしておられるが、その一端が、看護研究の分野にも及び、大分県秋秋精神病院看護研究会における講義録から本書が生れたということである。

著者がまえがきに述べているように、わが国の精神医学の後進性と、精神科医療の混乱はここ十年来精神科医師の反省を促しつつきて、未だ全体的に新しい体系を生み出したとは決していえないが、そんな中で、著者は新しい精神医学の一つの方向を自分なりにまとめ、そして実践に結びつけようとする意図的な努力をしていることが、本書の中であらう。

本書の内容は第1部精神科看護の基礎(1~4)と第2部精神科看護の実践(1~7)から成り、前者の1.「精神科医療の歴史」においては他の教科書にみられるような歴史の記述のあとに引きつづいて精神療法、作業療法の記載が見られる点では、すでにこれらの療法が歴史を語るほどの年数を経ていることがうかがわれる。2.「心の構造とはたらき」においては簡略ではあるがきわめてわかり易く精神分析的な基本が述べられている。次の3.「一般精神療法」においては、看護の実践の中での精神療法的にかかわり合いに重点が置かれ、とくに父親的と母親的役割の両面を看護婦が如何に使い分けるかを

具体的に教示してくれているのは、看護婦にとってかなり役立つであろう。4.「開放病棟と閉鎖病棟、そしてディケア」では、開放と閉鎖の場合の治療的ふんい気の差がきめ細かく述べられており、「閉鎖病棟では看護者との空間的距離が短かく、コミュニケーションが付き易い」という点に長短両面を解釈し、閉鎖病棟にもそれなりの価値を認めている。

第2部は精神分裂病、躁うつ病、神経症の患者の看護、人格障害・アルコール中毒・薬物依存の看護、思春期・青年期の適応障害の看護、初老期・老人期の神経症と精神病の看護などの項目で、それぞれ簡単な病因論、病前性格の特徴などもあげながら、目標症状と看護について具体例をあげて記述している。この中で神経症については、不安神経症と心気神経症との区分がわかりにくいので、後者についても症例をあげた方が親切であろう。また看護婦は生涯を通じて色々な科目の患者に接するので心身症について若干の解説がほしかった。思春期の項はいく分冗漫な部分もあるがいていねいに書かれており、ランゲンの追跡調査などもあげられていて興味ぶかい。最後の「精神障害者の家族と精神科看護」(第2部、7)が本書ではもっともユニークなところと考える。著者自身の精神分裂病者の家族研究によれば、予後と家族との関係で、妻子のあるものは予後がもっともよく、次

は両親のあるもの、もっとも悪いのは母一人と患者のみの場合であり再発し易いという。また患者の母親達には3つのタイプがあり、1.依存型、2.自信欠乏型、3.責任転嫁型で、1から3へと順に医療に対する協力が悪くなるが、こうしたことを承知の上で看護婦は母親達に誠実に根気よく接しなければならないと著者は示している。そして、母親が医療に協力的になると父親もそれについて協力するようになる、という連鎖関係も強調されている。また、家族面接の方法は同席面接を良とし、とくに面会だけでなく、患者が入院生活の中でやっていることを一緒にやらせて病人に対する共感をもたせる一方、患者には安心感をもたせ、さらに他の患者にも目を向けさせることを奨めている。このへんは著者の経験が強くおし出され迫力があり同感であるが、果して実践する病院がどれだけあるかわが国の現状を想うと寒心の至りである。

最後に西園氏の引用した「家庭にしろ、医師にしろ、なおそうとする意志があるならば分裂病は永遠にあり続ける」という信念に本書の読者が一人でも多く賛同して精神科医療を担ってくださることを念願する。

(A5, 頁 250, 写真 8, 1977, ¥2,000
〒160)